

うさぎ・くにさぎの珍らしい石橋

渡辺 信幸

無動寺(真玉町)の奥の路傍に「大黒缸」の記念碑がある。「缸」は石のハシ、橋は木のハシ。以前は材料で字も区別していたのです」と、応暦寺の大嶽順公師から教えて頂いたのは二十年も前になるうか。当時私は国東半島の石仏や石塔に憑かれたように探し廻っていたが、西国東に珍らしい構造の小さな石橋が幾つも有るのに気が付いた。大嶽師に話すと「そんな橋は小水取に行く所や弥勒寺の前にもある」といった具合である。

急いで写真にすることもあるまいと思いつながらも、形が美しく環境もよいので写真にしたのが「写真3」の橋である。それから二年ほどあとに水害があり、河川改修工事が急ピッチで進み、あつと言う間に、あれほど有った石橋が姿を消した。勿論、写真3の橋もである。

珍らしい構造というのは、「川幅と同じか、川幅より短かい石を利用するについての知恵」とでも言おうか。私が参考になっている数冊の本の何れもが、大きくて美しい形の眼鏡橋についてのみ詳述し、小さな石橋についての記載がないので私だけが珍らしいと思っているのではないかと思いつながら現在に到った。この間、九州各地や山口県と足を伸ばせば伸ばすほど「珍らしい」が、確かなものになる気がしているのである。そこで想像する国東の珍らしい石橋の発展過程を順に紹介する。

1 真玉町白野小河内(現存・写真1・寸法図A)

白野の谷の一番奥に小河内部落がある。ここまできると白野川は小川となり、河川改修工事の必要がないので昔日のまま。川の側壁や底は岩盤を露出している。部落入口の土谷長治氏宅に通じる小道に、この石橋が架る。自然石ばかりで構成している。

両側で支える数個の石は横むに従い内側にせり出しており、この上に川幅と同じ長さの二枚の踏石を並べ、隙間に小石を詰め、上部を平にするため土を置く。注目したいのは踏石

を乗せる石の外側には、より重い石を置いてあることである。

2 真玉町白野小河内（現存・写真2・寸法図B）

小河内部落の中ほどで、左（北側）にある数軒の家に通じる道が分かれて弧を画く。その中ほどの奥にこの石橋がある。

1の橋から二〇〇メートル上流である。

川幅より長い踏石を渡せば、ことは簡単に解決しそうだが、その重量を両側で支える岩が許さない。踏石を軽くしたときの智慧がここに見られる。数個の石で内側にせり出すように積むのは、前記1と同様である。踏石を直接支える石は、踏石ほどの大きい石を使っている。土の中のことは判らないが、テコの原理を応用して石を乗せているものと思われる。図の左側は山に接近し、しかも用水を流すために一本の枕石を置いてある。1よりもテコの原理が明白になっている点に注目される。

3 真玉町大岩屋、京田（現存・図C）

応曆寺から奥の有寺に行く途中、右に見える京田部落きょうたに行く道が分かれる。この道に架る石橋である。拡幅された分だ

けがコンクリート橋で、以前の幅が石橋である。

片側五本、計十本の角材を中央で拌み合せている。見えないうちの中ではストツプをかける石を配置しているという。永い年月の間にストツプが効かない部分があるのか、中央からずれた組がある。

4 真玉町白野浜（消滅・写真3・図D）

白野浜公民館の前で北川とこれに合流する小川の接点がある。ここに三つのコンクリート橋があるが、以前はいずれも石橋であった。写真3は宗武雄氏宅に入る橋であり、冒頭に書いたように二十年前の撮影（昭和四十二年）である。この宗家の先祖である「宗真哉そうしんがい」については、「真玉町誌」人物の章に詳しい。文化元年生れ、文久二年死亡。この真哉がいつも自慢していたのは「大阪には心齋橋が一つしかないが、ここにはシンサイ橋が三つある」と。だが真哉が架けたのか、それ以前からあったのかは不明である。

三本の踏石を両側から突張り支えるもので、支える石の土の中の情況が判らなかつたが、これを知る人は一様にストツプをかける石を咬ませたと言った。この型式の石橋は多

く見られた。踏石の長さ二四〇センチ、幅五〇センチ、これを三本並べていた。

5 宇佐市山本(現存・県指定・写真4・寸法図E)

鷹栖観音堂の手前一〇〇メートルの所にある。西側の山から駅館川に注ぐ支流にこの橋がある。駅館川側にコンクリートの橋を作ったので、山側にあるこの橋は使用されず、保存されているのは嬉しい。観音堂の住職「とくしん」によって架けられたと伝え、親柱は川向うの安部信二氏宅に保管されている。「延享二乙丑歳、十二月吉日」(二七四五)の紀年銘がある。

三本の縦梁(歩く方向)と、これを受ける二本の横梁、これを斜めに支える六本の杖柱。縦梁は兩岸に渡して延長させた六本の梁である。以上がガッチリと組合され、上部に踏石を敷詰めているが、歩き易くするために土を置いている。石橋研究家の山口祐造氏は、この形式を「方杖型」としているとか。

あとがき

以上が珍らしい石橋の発達順である。大袈裟な、と言われるのは覚悟のうえ、早い時点であればこれを証明できる多くの作例があったはずである。残っているかも知れない石橋の徹底した調査が望まれる。

消えた石橋の調査を試みたが、現地の古老は「橋の下まで見て通らんき、いま頃そんなことを言うてん判りやせんで」と。尤もな話である。惜し気もなく破壊した行為は残念でない。

宗家の庭には、分解され放置されている橋がある。ここでは昔日の姿に返ることはまずあるまい、いまなら復元出来る。宇佐市の県立歴史民俗資料館の庭に是非組立て、永久保存をして頂きたいと、この一枚の写真3を見ながら切に願うものである。

(豊前市誌編さん室囁託)

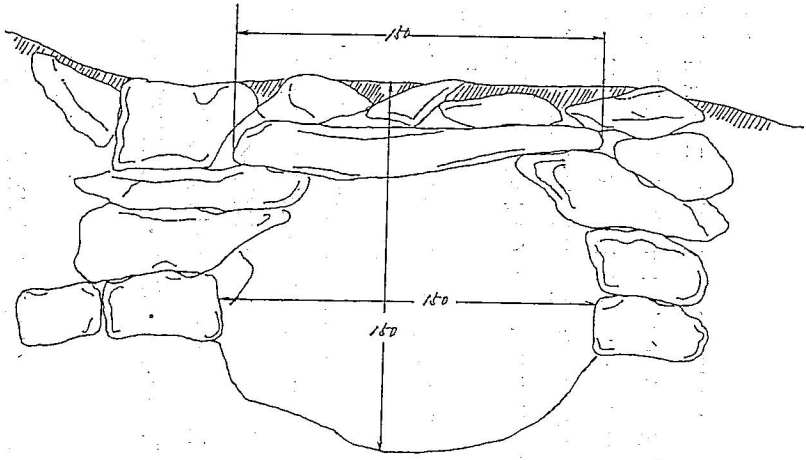


图 A



写真1

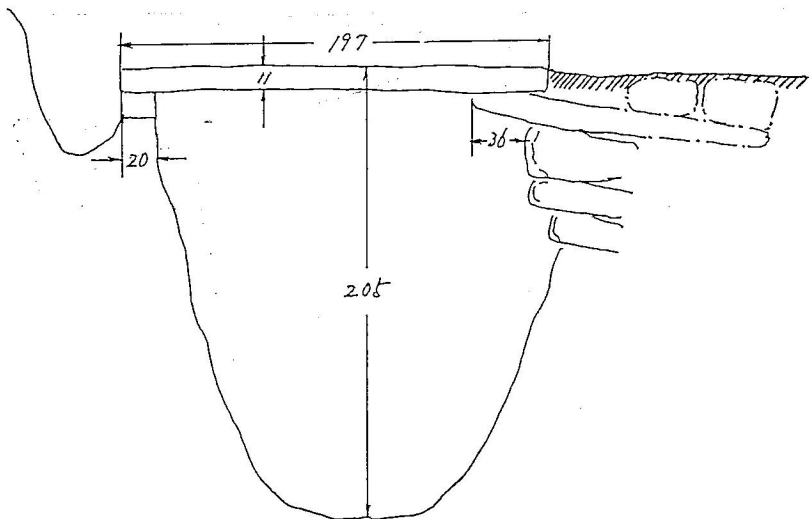


图 B



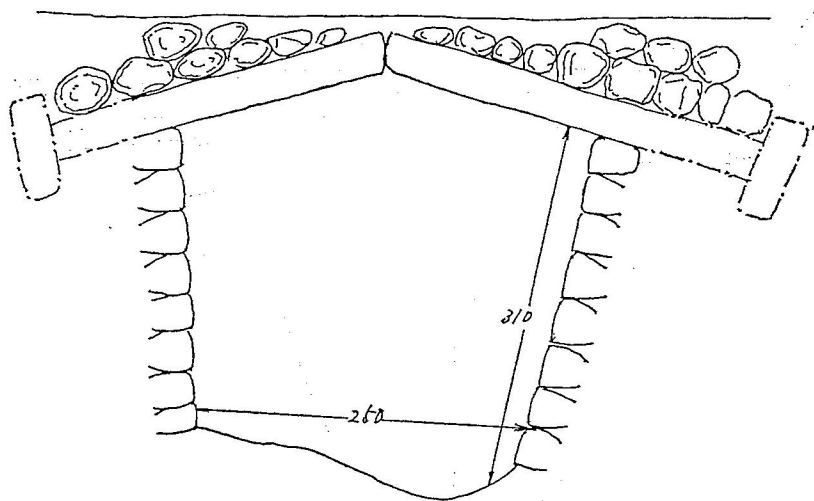


图 C

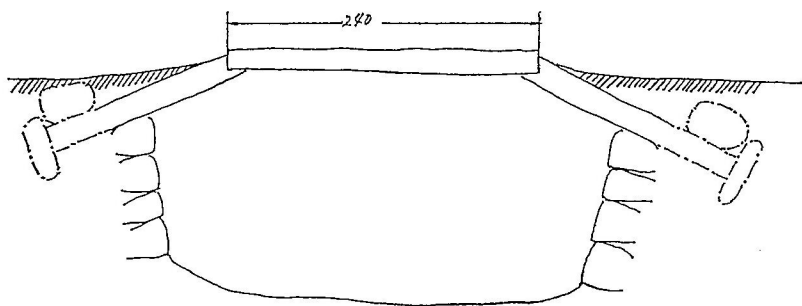


图 D

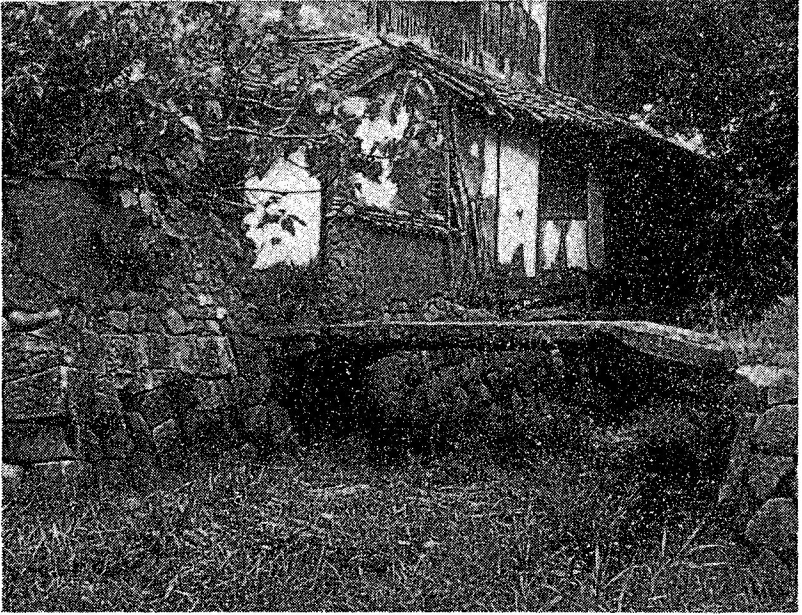
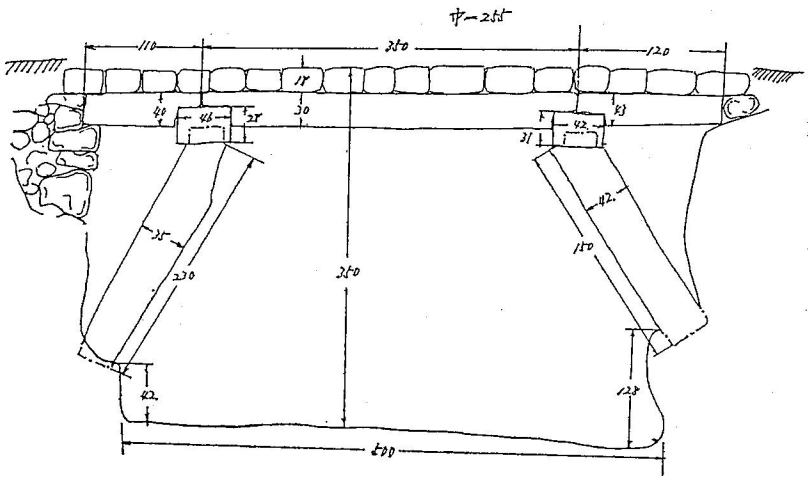


写真 3



五五

图 E

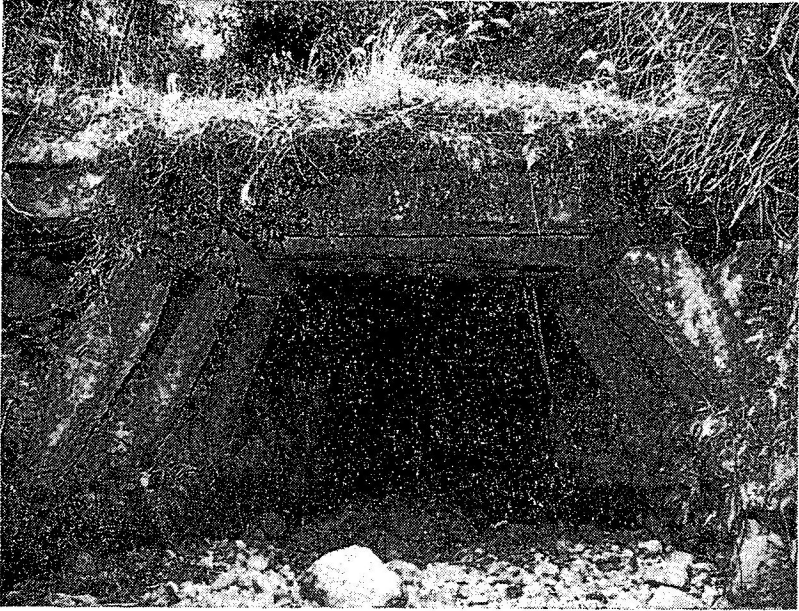


写真4

とくしん橋

会 告

会費は年度の当初に納入して下さい。会運営の大切な基金です。振込みは、次のいずれかでお願いします。

- (1) 郵便振替口座 下関 8～5294 大分県地方史研究会あて。
- (2) 大分銀行県庁内支店・普通預金口座の 1643211 大分県地方史研究会あて。

なお、会費納入の遅れている方は、分割でもよいので、ご協力願います。